

# 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

けいざんぜんじ  
瑩山禅師

令和2年2月第4週放送

---

大本山總持寺を開かれた瑩山禅師は、鎌倉時代の中頃に、今の福井県越前市帆山(ほやま)町にお生まれになりました。幼い頃から観音様を信仰する母の元に育ち、八歳の春に母に連れられて大本山永平寺に登り、十三歳で永平寺二祖懷 莽禅師の最後のお弟子として出家得度をされ、正式に僧侶となりました。十八歳になると更に諸国行脚の旅に出て、越前の宝 慶寺、そして京都の万寿寺と東福寺で禅の修行を、比叡山で天台の教学を学び、更に紀州の興国寺で再び禅を学ばれて越前の宝慶寺に戻られます。

それは、かつて道元禅師が正しく伝えられた仏の道を求めて諸国を行脚し、広く学ばれた道のようにもありません。

その道を求める志は益々堅いものとなり、瑩山禅師は二十八歳で四国の阿波に城 満寺を開き、住職となって、「授戒会」を開いて多くの一般の人々を仏教徒にする儀式を行い、教えの縁を結ばれて仏道に導きました。

三十五歳で今の石川県金沢市の大乘寺の住職となり、その二年後からは、お釈迦様から曹洞宗第二祖である懷莽禅師までの伝記である『伝光録』をお示しになりました。そして瑩山禅師のもとには優れた修行僧が多く集まるようになり、曹洞宗の教えが広まる土台が築かれました。

そして金沢に父の供養の為に浄住寺、続いて羽咋に永光寺を開いて『坐禅用心記』を著され、道元禅師が日本に伝えられた坐禅の作法や心構えを引き継ぎ、

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

具体的に解り易く示されました。

五十八歳の時には能登にあった律院りついでんの諸嶽観音堂しよがくかんのんどうを寄進されると禅の寺院に改め、總持寺と名付けられました。伽藍が整うと、弟子の峨山がさん禅師に譲られて永光寺に戻って修行の規則や心構えを示した「瑩山清規けいざんしんぎ」を著しました。

永光寺は修行道場としての発展を遂げ、總持寺は福井県の永平寺とともに、曹洞宗の大本山として今日に至ります。

瑩山禅師は一般の人々への布教教化に観音信仰を用いて広く仏縁の道筋をつけられ、今日、禅が世界で安心（あんじん）のより所とされる元となりました。

坐禅は今や椅子坐禅としても行えるようになり、日本のみならず海外においても、多くの人々に親しまれる修行のひとつとなりました。この遠い、しかし確かにお釈迦様から続くおさと覚りへの道筋に瑩山禅師（がいらつしゃる）ことに、感謝の思いをいたしたいものです。

— 終 —